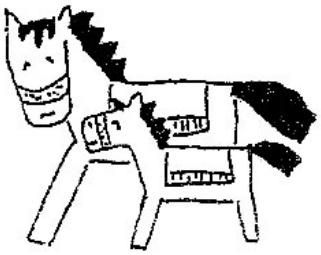
お馬のかあさん
やさしいかあさん
子馬をみながら
ぽっくりぽっくり
あるく

おうまのおやこ

子育ても
あせらず待ちましょ
ポックリ、ポックリと



令和3年 1月 NO.314

〒 760-0044 香川県高松市御坊町2-2
高松第二保育園内地域子育て支援センター
TEL:087-821-9347 FAX:087-851-0857
http://oumanooyako.sakura.ne.jp/

（厚生労働省・高松市委託事業）

～どなたでも～ 1月の主な活動 ～お気軽にどうぞ～

1月 14日	木	こうさぎおはなし会 15：30～16：30	専門の方が来園し楽しいおはなしや指人形、ペープサートなどあります。
1月 15日 29日	金	うたうたい「カラヴィンカ」 19：00～20：30	新しい年からは元気が出るおとなのうたもうたってみたいです。
1月 16日 23日	土	体 験 保 育 10：00～12：00	室内でも運動あそびができます。小さいお子様もどうぞ。
1月 16日	土	香川みすゞさんの会 12：00～14：00	昼食を共にしながら昔ながらのお正月あそびをします。（準備のため、1/13までに申し込みください）
1月 30日	土	絵本と小物づくり 14：00～16：00	あおむし画用紙マジックをつくります。子育てが楽しくなる小物づくりです。

・火～土の9:00～18：00までは、園内開放していますので、親子でご来園下さい。
（但し、月・日曜・祭日は休み）

育児相談（月～土）9：00～18：00
しつけや子育てについての悩み、保育園生活入園・見学についての相談もどうぞ。

冬の雨

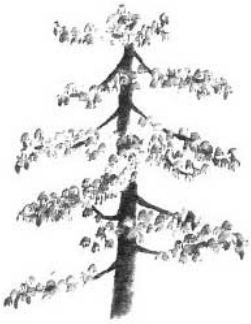
「母さま、母さま、ちょいと見て、
雪がまじって降ってて よ。」
「ああ、降るのね。」とお母さま、
お裁縫（しごと）してるお母さま。
氷雨（ひさめ）の街をときどき行くは、
みんな似たような傘ばかり。

「母さま、それでも七つ寝りゃ、
やっぱり正月来るでしょか。」
「ああ、来るのよ。」とお母さま、
春着（はるぎ）縫（ぬ）ってるお母さま。
このぬかるみが河（かわ）ならいいな、
ひろい海なら、なおいいな。

「母さま、お舟がとおるのよ、
ぎいちら、ぎいちら、櫓（ろ）をおして。」
「まあ、馬鹿だね。」とお母さま、
こちら向かないお母さま。
さみしくあてる、左の頬に、
つめたいつめたい硝子（ガラス）です。

金子みすゞ童話全集6
「さみしい王女・下」より

☆今月の内容 ― すべては光る 父・坂村真民のまなざし



すべては光る
父・坂村真民（しんみん）のまなざし

西澤　真美子

○自然と共にある真民の詩

鮒（ふな）と星

お父ちゃん
このふなにがしてやろうね
みぞごの浚（さら）えで
妻がとった大きなふなを
真美子が見て言う
お父ちゃん
どこにつれてゆかれるのか
しんぱいしているだろうね
もう暗くなりかけてから
川へにがしにいく
わたしについてきながら
真美子がはなしかける
お父ちゃん
下の川より
上の川の方がとられないよ
あっちへゆこうよ
そうね
そうしようね
二人で大きな松の下をとおり
川の深いところに
放してやる
ふなのよろこびが
星となったのであろうか
松のうえの空に
一つきらきらと光っていた

これは父と子の会話の詩です。お父さんが耳を傾けてくれているから、子どもは一生懸命自分で考えて話すのです。その判断を尊重して一緒に鮒を逃がしに行く。私たちは、親から命令や指示されることはほとんどありませんでした。子どもなりに自分で考えて行動している。大人で言えば、自分で責任を持つ。小さいので考えるのにも時間がかかり、たどたどしい言葉でしか表現できませんが、父も母も辛抱強く聞いてくれました。一生懸命考える子に。考えたことを言える子に。子どもは、親の生き方を見て育つのです。

父の詩には、花や木や鳥や星など、自然がたくさん出てきます。生活自体が自然と共にありました。初雪で白く輝く山の景色を、3人娘を一人ずつ抱き上げて見せてくれる詩、虹を家族中で眺めて喜んでいる詩、香りよい白い花に転げ回って喜ぶ子どもたちの詩など、限りがありません。この歳になっても、夕方洗濯物を取り込む時、遠くの山が雪で白く光っていると寒さを忘れて見とれてしまいます。小雨が降っている中に日が射し始めると、必ず外に走り出て虹を探しています。道を歩いていて花の香りがすると、立ち止まって探し、見つけると清々しい気持ちになります。小さい時にしてもらったことが、今の自

分を作っているのです。父と母がそういう生き方をしていたということなんですね。

父は詩を書き始めた時、1 年に 1 冊、詩集を出すことを自分に課しました。むろん、無名ですから自費出版です。これが 14 年間続きました。ボーナスを全て回していたとの事。けれど不満そうな母の顔を見たことがありません。母は縫物や編物が好きで、ミシンを踏んで洋服を縫い、夜なべをしてお揃いのセーターを編んでくれました。娘が 3 人もいるのに、坂村家にはお雛様がありません。母は箱を段々に重ね赤い布を掛け、私たちはキューピーさんや折り紙で作った姉様人形など持っているものを全部飾り、お雛様の歌を歌いました。それはそれは楽しいお雛様だったのです。

足るを知ると言うか、現状を工夫して明るく暮らす母のお陰で、生活が質素だとも思わず、心豊かに育ちました。晩年、子どもにどんな教育をしたらいいかと聞かれると、父は「教育などしなくていい。自分が一生懸命生きていればいいだけです」と答えていました。私たちは時に、机に向かう父の後ろ姿を目にすることがありました。その父の後ろ姿の厳しさと、母の優しさに包まれて育ったのです。

○体の中に光を持つ人生を

父は国語の教師をして、生活を支えながら詩を作り続けました。この二足の草鞋（わらじ）は、末の私がお嫁にゆき、職を辞した 65 歳で「詩一筋の生活」になりました。父は、50 歳を前に一遍上人（いっぺんしょうにん）の足跡をたどるようになり、深く敬仰（けいぎょう）し、真民詩で後を継ぎたいと思うようになります。

そして“詩国”という見開きの詩誌を発刊したのが 53 歳、95 歳の 500 号まで毎月休むことなく続きました。切手を送っていただき、それを貼って送り返すのです。詩を作り、編集と校正、封筒の宛名書き、切手貼りまで全て父の仕事です。「自分の手でやらないと意味が無い」と。この詩国を出し続けることが詩人として生きる“背骨”を成し、虚弱な体は病気をする暇もなくなり、97 歳という長寿を全うしました。詩を作り始めた 40 歳の真民が“澄んで見つめた視線の先にあるもの”は最後まで、まったく変わりません。その姿は、

“日々の継続”、そして「老いとは、歳でなく大願を無くすことだ」と言っておりました。

なにかわたしにでも
「なにかわたしにでも
　できることはないか」
清家直子さんは
ある日考えた
彼女は全身関節炎で
もう十年以上寝たきり
医者からも見放され
自分も自分を見捨てていた
その清家さんが
ある日ふと
そう考えたのである
彼女は天啓（てんけい）のように
点字のことを思いつき
新聞社に問うてみた
新聞社からわたしの名を知らされ
それから交友が始まった
彼女は左手の親指が少しきくだけ
そこで点筆をくくりつけてもらい
一点一点打っていった
それから人差指が少しきき出し
右手の指も
いくらかずつ動くようになり
くくりつけなくても
字が書けるようになり
一冊一冊と点訳書ができあがり
今では百冊を超える立派な点字本が
光を失った人たちに光を与えている
「なにかわたしにでも
　できることはないか」
みんながそう考えたら
きっと何かが与えられ
必ず広い世界がひらけてくる
年中光の射さない部屋に
一人寝ていた彼女に
手紙がくるようになり
訪ねてくる人ができ
寝返りさえできなかったのに
ベッドに起きあがれるようになり
あったかい日はころころころがって
座敷まで出ることが
できるようになり
ある日わたしが訪ねた折などは
日の当たるところでお母さんに
髪を洗ってもらっていた
どんな小さなことでもいい
「なにかじぶんにでも
　できることはないか」と
一億の人がみなそう考え
十億の人がみなそう思い
世のため人のため奉仕をしたら
地球はもっともっと
美しくなるだろう
片隅に光る清家直子さんよ

真民 53 歳の詩です。真民の詩には、光がたくさん出てきます。真民は「体の中に光を持とう、苦しみのなかにあっても光を消さないでゆこう」と呼びかけています。私たちも体の中に光を持って、一日一日を大切に過ごしてゆきましょう。

ROFILE　　坂村　真民（さかむら　しんみん）

1909 年（明治 42 年）熊本県玉名郡府本村（現・荒尾市）生まれ。本名、昴（たかし）。8 歳の時、父親が急逝し、どん底の生活の中、母を支える。神宮皇學館（現・皇學館大学）卒業後、熊本で教員となる。その後、朝鮮に渡って師範学校の教師に。終戦後、朝鮮から引き揚げて愛媛県に移住。高校の教員として国語を教え、65 歳で退職。58 歳の時、砥部町に定住し、92 歳で砥部町名誉町民に選ばれる。2006 年（平成 18 年）97 歳で砥部町にて永眠。